



HuRP通信

2012年

新春号 (第65号)

12・1月合併号

<http://www.hurp.info>

HuRP会員のみなさま、新年のごあいさつを申し上げます。

昨年は日本のみならず、世界各地で大きな災害が起こり、一年を通して悲しい出来事が多かったように感じます。ただ、このような困難の中で、隣人同士で助け合い、力を合わせて立ち向かうことを通して、「生命の尊さ」について改めて向き合うことができたように思います。

今年は大きな幸せが、日本に、世界に訪れる事を願います。

HuRPもささやかではありますが、市民の力を信じつつ、活動していきたいと思っています。

本年もどうぞよろしくお願ひいたします。

HuRP ソウル訪問記 (2011年12月16日(金)～18日(日))

HuRPの有志5人で、2011年12月16日(金)～18日(土)、韓国・ソウルを訪問しました。今回の訪問は、2012年5月にHuRP出版より刊行予定の書籍『金大中図書館に行こう!』に関する打ち合わせと、韓国の歴史や文化に触れる目的としています。

ソウル訪問 行程表

◎12月16日(金)

西大门刑務所歴史館、西大门独立公園、
ソウル歴史博物館の見学

◎12月17日(土)

金大中図書館見学、館長の金聖在先生と会談。
その後、韓勝憲先生と会談。
日本大使館前・「慰安婦」像を見学。



西大门刑務所歴史館の展示館。

◎12月16日(金)

仁川空港に降りたち、到着ゲートを出た途端、今まで経験したことのない寒さが身を貫きました。訪問中、気温が低いということはニュース等で把握していましたが、想像以上の寒さ。滞在中は最低気温マイナス10°Cを経験することができました。

空港を出た私たちは、ホテルに荷物を置いて西大門刑務所歴史館の見学へ。閉館時間30分前という入館時間を過ぎていきましたが、受付の方の好意で、閉館時間までに戻ることを条件に館内に入ることができました。

西大門刑務所についてパンフレットには、日本の植民地時代には「祖国の独立を勝ち取ろうと日本帝国主義に立ち向かって戦った民主化運動家達」が、解放後は「民主化を成そうと独裁政権に立ち向かって戦った民主化運動家達」が収監され、「監獄暮らしの苦しみを味わい、犠牲になった場所」であると記されています。



厳しい取り調べの様子の復元。
奥には「日の丸」が。

展示館1階・2階は資料やパネル展示が、地下は、刑務所内の拷問室、死刑場、監房の様子が復元されていました。

地下に降りると、横柄な態度でこちらを睨む日本兵であると思われる蝋人形が、訪れる人を出迎えます。先に進んでいくと、取り調べや監視の様子なども蝋人形を用いて再現されており、監房からは収監されていた方の悲痛な叫び声を再現したであろう「万歳、万歳」(マンセー、マンセー)という音声が流れます。

外には実際に使用されていた死刑場が残されています。死刑場はレンガの塀で囲まれて

いるのですが、その塀のわき（死刑場の外側と内側の二か所）にはポプラの木が植えられています。これは「慟哭のポプラ」と呼ばれており、このポプラに死刑囚が泣いてすがりついたということです。このポプラは、根を同じくしたポプラが死刑場の内側にも生えていました。外側のポプラに比べて、やせて細々と生えている内側のポプラが、死刑場の外と内、すなわち生と死を象徴しているかのようでした。



死刑場(塀の内側)と「慟哭のポプラ」。

西大門刑務所歴史館を出た後は、隣接する西大門独立公園へ。公園内には、3・1独立宣言記念塔、独立門、殉国烈士追悼塔が並んでいます。公園内はきれいに整備され、遠くにソウルタワーが見えるなど景色も美しく、市民の方々の憩いの場になっているようでした。

とはいって、日本人にとって安易な気持ちでは訪れることができない場所であることは確かです。しかし、長らく続く日本と韓国の国民の感情の衝突に向き合うにあたって、訪れておくべき場所だと思います。

西大門刑務所歴史館

<http://www.sscmc.or.kr>

韓国ソウル特別市西大門区統一路 251

・開館時間／3月～10月：9:30～18:00、11月～2月：

9:30～17:00（30分前まで入館可能）

・入館料／大人 1500 ウォン、青少年 1000 ウォン、児童 500 ウォン

・休館日／1月1日、旧正月、秋夕、毎週月曜日、公休日の場合にはその翌日。

◎12月17日（土）

この日は出版に関する打ち合わせを終え、憲法裁判所の外観を見学したのち、日本大使館前の「慰安婦像」へ向かいました。



韓国の憲法裁判所。

12月14日（水）に、「慰安婦」問題の解決のために行動している韓国の市民団体「韓国挺身隊問題対策協議会」がソウル市・日本大使館前に「慰安婦」を象徴する少女の像（「平和の碑」）を設置しました。「韓国挺身隊問題対策協議会」は毎週水曜日に日本大使館前で「水曜集会」を行っていますが、設置された12月14日はその1000回目にあたる日でした。

私たちが到着した時には、数日前にニュースで見ていたような人だかりはありませんでしたが、警備をしている警察官がおり、物々しい雰囲気は残っていました。私たちが「慰安婦」像に近づくと、警察官がとても近い距

離まで近づき、厳しい目つきで私たちの行動を監視していたのが印象的でした。



従軍慰安婦を象徴する少女の像
（「平和の碑」）。

◎12月18日（日）

帰りの飛行機に乗るために、ソウル市から仁川空港へ。空港までの道すがら、日本語の上手なタクシーの運転手さんが、街並を案内してくださいました。途中で「この川はイムジン河につながっているんです。」と説明してくださったときには、何ともいえない気持ちになりました。

今回の訪問では、日本の植民地時代に使われていた刑務所や「慰安婦」像など、日本人として気軽に訪れることができない場所を、短い時間でしたが、めぐることができました。これらの場所を訪問することを通して、日本の国内では、ニュースを通してしかなかなか知ることができない、韓国の市民の複雑な感情について向き合うためのスタートラインに立てたように思います。

次に韓国を訪問する際には、韓国の市民の方と両国に関する様々な思いについて臆することなく話ができるようになれたら、と思いながら帰路に就きました。（サヤカ）

『金大中図書館』訪問——出版の打ち合わせを兼ねて(2011.12.17)

はじめに

2011年12月17日、この日は最低気温がマイナス10度、日中でも吐く息の白さが鮮明な厳寒のソウル市。私たちHuRP会員5名はその寒さに全身をしびらせながら、「金大中図書館」(<http://eng.kdjllibrary.org/>)を訪問しました。私自身は2009年、親しくさせていただいている金大中元大統領の顧問弁護士を務め、金大中政権の際に監査院(政権をチェックする独立機関)の責任者だった韓勝憲(ハン・ソン・ホン)弁護士の案内で最初に訪問してから、数えて4回目の訪問となります。

今回は初めて訪問する会員の見学も目的でしたが、もう一つ、館長の金聖在(キム・ソンジェ)教授にお会いし、かねてより準備をしていたHuRPの出版企画『金大中図書館に行ってみよう』(仮題)の内容の最終確認をしていただくことも大切な目的でした。

1 「金大中図書館」とは

現在、韓国はご存じのとおり、民主主義の国ですが、1980年半ばまでは軍人が政権のトップにあった軍事独裁の国でした。その中で民主化のために闘った中心人物の一人が金大中氏です。金大中氏は韓国に民主化だけではなく、1998年の大統領就任後は、朝鮮半島の平和的統一(太陽政策)の推進(南北共同宣言)や日本との文化交流の正常化の実現にも取り組んだ人物です(現在の韓流ブームはこの文化交流の正常化なくしてはありえなかつたでしょう)。

その金大中元大統領の足跡を集めた資料館が「金大中図書館」です。この図書館は、延世大学付属図書館として、金大中元大統領宅の隣にあります。

アメリカには、大統領が退任後にその名を冠したライブラリーがいくつかありますが、2003年11月にオープンしたこの図書館はアジアで初めての大統領名を冠したライブラリーでもあります。

ここには、韓国の民主化運動の牽引者であり、象徴でもある金大中氏の生誕からの資料はもちろん、軍事政権下での政治活動や当時亡命先の日本からKCIAによって拉致された事件は「金大中事件」(1973年8月)や1980年に自身が死刑判決を受けた光州民主化運動(光州事件)、そして大統領時代のさまざまな政治活動の資料が展示、保管されています。

ここに所蔵展示されている資料は、現代韓国の歴史と東アジアの人権と平和運動にとっても欠かすことのできない貴重なものです。

※ 展示物と所蔵

ノーベル平和賞も含め、金大中元大統領の生涯と韓国の現代史を大統領就任以前から就任後までの約1万6000点の記事、写真、約1万冊の本などを所蔵。

1階は資料、記事、写真が展示される展示会センター。

2 『金大中図書館に行ってみよう』を刊行するということ

この図書館の存在と内容を知った時から何らかのかたちで日本に紹介したいと考えていました。

というのは図書館には、金大中氏個人の資料にとどまらず、第2次世界大戦後に韓国の市民が軍事政権に抗して平和と民主主義を勝ち取り、それを発展させていることを肌で感じることができる、私たちにとっても学ぶべき教材が豊富にあるからです。

HuRPは人権と平和にかかわるさまざまな活動を学び生かすことを目的にしている団体です。HuRPが紹介する書籍を作ることができたならば、それは意義深いことです。

そう考え、約1年前に韓弁護士と金館長に「金大中図書館」を日本に紹介する書籍を作りたいという構想をお話ししたところ、直ちに賛同いただき、韓弁護士の寄稿や図書館からの資料、写真などの無償提供、さらには監

修まで身に余る多大な援助をいただきました。

この書籍の編集の過程で、本当に国を越え、人権と平和を共通項とした人の交流はこうあるべき、ということを身をもって示してくれる両先生とお世話になった方々。

民主主義を自らの手で勝ち取った人の強さとは何かを私たちに教えてくれます。

今回はそのことを改めて深く感じることもできた有意義な訪問でした。

なお、書籍は今年5月に刊行予定です。ご期待ください。（串崎）

今月のHuRP

「死刑を考える日」（2011年12月9日、日本弁護士連合会）



2011年12月9日（金）、日本弁護士連合会主催の「死刑を考える日」に参加した。韓国映画「ハーモニー 心をつなぐ歌」が上映されるということで、実はそれが目的だ。

舞台は韓国、実在する「清州（チョンジュ）女子刑務所」。ここに収監された受刑者たちが、合唱団を結成し、それぞれが抱える問題、心の傷を、歌によって超えていくとする様子を描き出す。ストーリーは、獄中で出産したジョンへと息子ミヌを中心にまわっていく。法律上、養育が許されるのは生後18カ月まで。周りの受刑者たちに見守られながら、息子に精一杯の愛情を注ぐジョンへだが、時が来たら養子に出すことを決めている。

合唱は共同作業だ。それぞれ複雑な事情を抱えながら、罪を犯し、服役している女性たちにとって、互いを信頼し、ものごとを発展させていくことは難しい。しかし、合唱を通じて彼女たちはそれを獲得し、希望を見いだしていく。それが合唱の表現力の向上と見事に呼応していく。

合唱団を率いる元音大教授の受刑者が、一人ひとりの生と罪と、音楽をまとめあげていく作業を追いかながら、彼女たちがなぜ罪を犯したのか、それを乗り越えるとはどういうことなのか、観ている私たちは、必死に想像することになる。

数年のうちに実力が認められた彼女たちは、クリスマスイブにソウルで開かれる合唱大会に招待される。当日、「犯罪者」が「外」で活動することへの社会の反応、会いに来た、あるいは拒絶した家族の様子、聴衆たち、そして何より白いドレスを着た彼女たちの、歌に託した叫びがひとところに響きわたる。

筋を追うのはこのあたりにまでしよう。この映画は、実話をもとにしていて、実際に清州女子刑務所が撮影に協力したこと。

韓国では1997年を最後に執行は行われていない（アムネスティは「事実上の死刑廃止国」としている）が、廃止法案は何度も廃案となっている。李明博大統領も死刑維持を公言しているという。

日本では、2011年こそ執行はなかった。が、国民の過半数が「死刑に肯定的な」意見を持つと言われ、しばしば制度存置の理由に掲げられる。しかし、裁判員制度があろうとなかろうと、国が死刑という刑罰を採用していることを黙認する以上、主権者である私たちが手をかけて殺そうとする命が存在しているということだ。

合唱大会で受刑者たちの歌う「ソルヴェイグの歌」は、身勝手に出て行った恋人の帰りをいつまでも故郷で待つ女の歌。だが、歌（生）を手に入れ、生きようとする受刑者たちに、こう言われているような気がする。

「あなた方は相変わらず無関心なのか。まだ死刑という制度の過酷な本質を見ようとしているのか。私たちは待つ、待つ、待つ…」(A.T)

◆「ハーモニー 心をつなぐ歌」(2010年製作)／公式サイトは <http://www.harmony-movie.com/>

♪ オノQの今月の一曲 ♪

“Testify” (Rage Against the Machine, 1999)

・音楽にできるふたつのこと

2011年のウォール街発の若者によるデモは、世界各地に広がっていましたが、この出来事からは今回紹介をするRage Against the Machineというバンドを思い起こしました。なにしろ、彼らはこれまで「1%の富裕層」の問題を何年も前から指摘し、そのミュージックビデオでは金融街を占拠しゲリラライブを行う映像もあったのですから（ちなみに撮影をしたマイケル・ムーア監督とともに逮捕される様子まで収録されています）。

「レイジ～」のギタリストであるトム・モレロは、父親がケニアの社会運動組織の一員であり、母親が公民権運動の活動家という家柄の出身でした。ハーバードの政治学科を首席で卒業したという——音楽家にしては——異色の経験の持ち主で、現代きってのポリティカルなアーティストといえるでしょう。

表題の曲は、彼らが1999年に作った“The Battle of Los Angeles”というアルバムにおさめられています。黒人層への人種差別を背景に起こった「ロス暴動」をモチーフにしたアルバムですが、曲中にジョージ・オーウェルの言葉を引用するなど、権威主義への批判・反体制といった彼らの思想が伺えます。

トム・モレロは「音楽にはふたつのこと——時代を反映すること、それと時代を変化させること——ができる」と語り、自らの音楽を現代の不安と同時に、権利のためにたちあがる人々へのアンセム（賛歌）だと語ります。Occupy Wall Streetにも駆けつけた彼が、このふたつのどのように実現していくのか、2012年は注目の年だといえるのではないでしょうか。

★編集後記★

2011年は、自然の大いなる“力”を感じた年でした。その一方で、世界に目を向けてみれば、“アラブの春”に代表されるように、一般市民の“力”を改めて感じた年でもありました。

現状を変化させるには、非常に大きなエネルギーを要するでしょう。でも、不可能ではないのです。日本の閉塞感を打破するのは、決して政治家だけの仕事ではないはずです。

日本での春の息吹を早く感じたいものです。（サヤカ）



ギタリストのトム・モレロ

特定非営利活動法人「人権・平和国際情報センター」(HuRP：ハープ)

Human Rights and Peace Information Center Japan (HuRP)

〒101-0065 東京都千代田区西神田2-7-6 川合ビル41号室

TEL/FAX 03-3234-3231 e-mail hurp@hurp.info HP <http://www.hurp.info/>